

博物館

ニュース

特集

「常設展リニューアルに向けて」

ミライズに出現!! 恐竜



飛び出せ博物館!! 徳島まるづかみ展・県西編

新しくなる博物館常設展示の一部を先どりして紹介する移動展「徳島まるづかみ展・県西編」が美馬市立図書館（美馬市地域交流センター ミライズ2階）で開催されます。中でも注目は、勝浦町で発見された植物食恐竜のイグアノドン類と同種の「プロバクトロサウルス」の全身骨格です。発掘調査で次々と明らかになってきた徳島の恐竜時代を知るための貴重な資料です。そのほかにも吉野川や剣山系を舞台に育まれた自然や歴史・文化を語る博物館資料を展示します。ぜひご覧ください。

（植地岳彦）

で
こ
木
偶

庄武憲子

はじめに

博物館ニュースの前号No.120で紹介したとおり、徳島県立博物館は今年（令和2年（2020））で開館30周年を迎えています。それを機に現在常設展全面リニューアルに着手しています。来年（令和3年（2021））8月には、新常設展がグランドオープンする予定です。筆者が担当するコーナーのイチオシについて紹介したいと思います。

最も充実した資料

筆者は平成7年（1995）に民俗担当学芸員として着任しました。それから25年、徳島県内の民俗資料の収集保存、調査研究、展示普及に取り組んできました。着任した時の民俗分野の館蔵資料点数は、2,770点、現在は18,906点です。ありがたいことに16,136点もの民俗資料を、県民の皆さんの協力を得て増やすことができています。新常設展では、これらの資料を存分に活かしたいと考えています。

さて、点数が増えたとともに、質も充実したと筆者が感じる資料は「阿波人形浄瑠璃」に関する資料です。これは平成23年（2011）から「阿波木偶箱まわし保存会」のメンバーと共同ですすめてきた、徳島県に特徴的な門付け「三番叟まわし」（図1）、大道芸「箱廻し」についての調査が大きく関係しています。舞台上で上演をする「阿波人形浄瑠璃」とは異なるものと見られてきた「三番叟まわし」「箱廻し」の資料を調べていくうちに、「阿波人形浄瑠璃」の新しい側面が見えてきました。筆者の担当するコーナーでは、ぜひ「阿波人形浄瑠璃」を取り上げたいと準備をすすめています。

知っているようで知らない「阿波人形浄瑠璃」

「阿波人形浄瑠璃」については、これまでの常設展でも展示してきました。阿波（現徳島県）が輩出した有名な人形師（人形を作る人）、初代天狗久の工房の大きかりな再現や、様々な人形師の手による多数の人形頭の展示、音声による『傾城阿波の鳴門 順礼歌の段』のさわりなど、「阿波

人形浄瑠璃」の特徴と概要をつかみやすい、よくできた展示だったと思います。平成31年（2019）に来館者に協力してもらったアンケートでは、91%の人が阿波人形浄瑠璃を「見たことがある」との回答でした。けれども残念なことに、開館以来常設展で紹介し続けていた、有名な人形師について「聞いたことがある」と答えた人は36%でした。知っているようで、実は知らないのが、我々にとっての「阿波人形浄瑠璃」ではないかと感じています。

「阿波人形浄瑠璃」の凄いところ

アンケートで「阿波人形浄瑠璃」を見たことがあると回答した人のほとんどは、「阿波人形浄瑠璃」の上演の様子を、実見したり、映像で見たりしたことがあるとしていました。「阿波人形浄瑠璃」とは、上演されているそのものなのかもしれませんが、けれども、博物館で常時「阿波人形浄瑠璃」の上演を見せることは不可能です。充実した資料で「阿波人形浄瑠璃」の何を見せるのか？考え抜いた末、筆者が凄いと思う「木偶」（木でできた人形）に注目していただきたいと、工夫を凝らしています。

「阿波人形浄瑠璃」に用いる人形「木偶」は、頭と胴につなげた手足からできています。博物館では、収集した「木偶」について、まず頭を、眉、目、鼻、口の形と動き、肌の色などから分類をします。例えば、目の縁が角になって、フキ眉（毛のついた眉）が上下に、目玉が左右と閉じたように動き、口が開閉して、ニク色をしている頭は、主役に用いられる「角目頭」（図2）。眉が細く青く描かれ、目が閉じたように動き、口の奥はお歯黒をしているように塗られ、白地の頭は、既婚女性の役に遣われる「女房頭」（図3）です。さらには、頭の内部を調べます。内部には銘が書かれてることが多いです。これによって作者や製作年代が確定できます。また、木目から頭の材質を調べます。館蔵の「木偶」の頭については、先述した「阿波木偶箱まわし保存会」との調査で、すべて内部を確認しています。新常設展では、AR（拡張現実）

という技術を使って、頭の内部まで観察していただきたいと思っています（図4、図5）。

また、頭の内部には、「木偶」の眉、目、鼻、口を動かすためのからくりが仕掛けられています。ヒゲクジラ類の食物濾過のための器官を材料にした、バネの伸縮によって、最多で5つの動きが施されます。見れば見るほどよくできたもので、これが「阿波人形浄瑠璃」の人形「木偶」の神髄です。じっくり観察できる資料を用意しましたので、楽しみにしてください（図6）。

「木偶」はまるで木製のロボット

最後になりましたが、上演中には衣装にかくれてよく見えない、「木偶」の手足も木で作られています。手や足についても、形と動き、色によって詳細に分類されています。これらを合せて一体の「木偶」となっています。動きを観察すると、まるで木製のロボットです。すぐれた「木偶」を作る技術を持ち、それを現在まで継承しているのが「阿波人形浄瑠璃」の一面です。

新常設展では、上演を見るだけではわからない「阿波人形浄瑠璃」の「木偶」の凄さを伝えたいと頑張っています。（民俗担当）



図1 守住貫魚のスケッチに見られる「三番叟まわし」（19世紀頃）

能楽に由来する千歳、翁、三番叟の三役が、国土安穩、五穀豊穰を祈る「三番叟」の儀式を、阿波（徳島県）では、わざわざ「木偶」を用いて行う例が多く見られます。「木偶」が根付いている証拠です。



図2 角目頭（金藤次）
眉、目玉、口が動きます。



図3 女房頭（政岡）
目が閉じたように動きます。



図4 図3の内部
上の頭の内部をのぞいたところですが、初代天狗久の銘があります。木目からはヒノキ材であると確認できます。



図5 図4の内部
上の頭をのぞいたところですが、右側の裏側に初代天狗久の銘が記されています。木目から材質はキリ材と確認できます。



図6 5つの動きが仕掛けられた頭の内部
何がどう動くか仕組みをじっくり観察していただけるように展示します。

新常設展の私のイチオシ！

谷田蒔絵 扇軍配散模様料紙硯箱

新常設展で展示される美術工芸資料から、谷田蒔絵の料紙箱と硯箱のセットを紹介します(図1・2)。

大きい方の箱が紙を入れる料紙箱、小さく平らな箱が、筆と硯、水滴などを収める硯箱です。どちらも箱の本体を木で作り、表面に朱漆を塗り、料紙箱の蓋には扇と軍配を、硯箱には扇と軍配を1面ずつ描いています。扇や軍配には、牡丹、桐に鳳凰、竹と梅、唐草など、それぞれちがう図柄を表しています。

使われている技術は、色漆を塗る「漆絵」、乾性油に溶かした顔料を塗る「密陀絵」、金箔片を粉末にして蒔く「消粉蒔絵」、金箔片をまだらに付着させる「金こがし」などです。このうち密陀絵は、油の乾燥を早めるために「密陀僧」(鉛酸化物)をまぜるので、その名があります。密陀絵は、奈良時代からある技術ですが、現在では富山県南砺市の城端蒔絵に伝わるのみで、それも一家相伝とされています。

「江戸時代の徳島に谷田蒔絵と呼ばれる製品があり、創始者が谷田忠兵衛である」とはっきり語られるのは、じつは明治時代になってからです。明治23年(1890)に、徳島県の松浦徳次郎ら3名が、東京の日本美術協会に、草花模様の香炉卓と宝尽模様の提重、やはり宝尽模様の食籠を持ち込みました。そして徳島には藩政期に谷田忠兵衛

が創めた谷田蒔絵があり、製品が貴重視されている、しかし今では技術が絶えていると説明したのです(『日本美術協会報告』第32号)。

ところで、徳島藩の家臣に谷田家があり、この家は由緒を記録した成立書を残しています。そこに忠兵衛の名が現れるのですが、彼は諱を定茂といい、かつて京極若狭守家に仕えていた浪人でした。京都から江戸に移り住み、延宝6年(1678)に7人扶持10石で絵師として徳島藩に抱えられ、宝永7年(1710)に亡くなりました。子孫も藩に仕えましたが、漆工との関わりは成立書のどこにも記されていません。

谷田蒔絵とされる製品の意匠を見ると、草花の種類などに限りがあり、描き方にも一定のパターンがうかがえます。それだけに、ひとりの職人が造ったとは考えにくい細かいちがいが目につきます。もしかすると、絵師の忠兵衛が当時の流行にならって意匠を考案し、それをういて複数の職人が製作したのかも知れません。

(美術工芸担当：大橋俊雄)



図1 扇軍配散模様料紙硯箱



図2 扇軍配散模様料紙箱 蓋表

新常設展の私のイチオシ！

徳島はカタツムリ王国

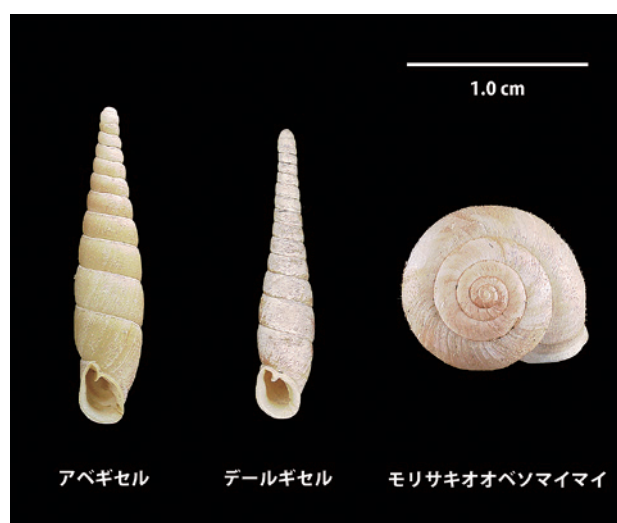
来年8月に予定されている新常設展のグランドオープン。そこでは、新たにカタツムリにフォーカスした展示を予定しています。なぜカタツムリなのでしょう。実は、徳島はカタツムリの王国なのです。皆さんご存知でしたか？

カタツムリとは、陸に生息する貝のなかまのことで、陸貝とも呼びます。日本で知られている約800種のカタツムリのうち、実に170種以上が徳島にいます。しかも世界で徳島にしか生息していない固有のカタツムリが9種も存在します。

そのひみつは、特徴的な地質構造と豊富な降水量にあります。県内には、石灰岩が地表に露出している場所が多数あります。カタツムリは石灰岩の主成分である炭酸カルシウムを食べて殻を作るため、雨が豊富で石灰岩地の多い徳島はたいへんすみやすいところです。しかも石灰岩があちこちに離れて存在していることから、自力で遠くへ移動できないカタツムリは、それぞれの場所に隔離され、気の遠くなるほどの長い年月をかけて独自に進化をとげました。こうした特有の自然環境が、

カタツムリのすばらしい多様性を育み、その地域にしかない固有種も生み出したのです。

カタツムリのコーナーは、「徳島の自然と暮らし」に新設します。リニューアル後には、徳島がほこる多様なカタツムリを皆さんに知ってもらいたく、できる限りたくさん展示しようと準備しています。
(動物担当：山田暲崇)



徳島固有のカタツムリ



「徳島の自然と暮らし」コーナー（リニューアル後のイメージ）

海部川の生きもの 徳島県南部のアカメ

来年8月にオープン予定の新常設展には、「川の自然と生きもの」をテーマに展示するコーナーがあります。このコーナーでは、徳島県の代表的な川として、吉野川、那賀川、海部川をピックアップし、そこに生息する生きものを展示します。今回は、その中でも“海部川の生きもの”の展示について少しだけ紹介したいと思います。

海部川は、高知県との県境付近の湯桶丸という山に源を持ち、海陽町を流れ、太平洋に注ぎこみます。この川は、大きなダムが建設されることなく、自然のままの美しい川の姿がよく残されています。新常設展では、海部川とその周辺に生息する魚や植物、昆虫などの実物標本やレプリカを展示します。その中でも、私のイチオシはアカメの剥製です（図1）。

アカメは、体長が1.2 mほどになる大型のスズキ目の魚で、静岡県から鹿児島県の沿岸部や汽水湖、河口域に分布します。釣り好きの人ならこの魚をよく知っているのではないのでしょうか。というのも、アカメは生きた魚を食べるため、ルアー

フィッシングの対象になっているのです。アカメの主な生息地として、高知県の四万十川がよく知られており、多くの釣り人が全国からアカメを求めて四万十川を訪れます。実は、四国では高知県だけではなく、徳島県にもアカメが生息しています。

“海部川の生きもの”の展示では、徳島県海部郡で採集されたアカメの剥製を展示します。この剥製は、全長が70 cmくらいの中型個体ですが、背中が盛り上がり、力強い魚体で、アカメの特徴がよく表れています。また、いぶし銀色のウロコも美しく、釣り人達が憧れるのも納得する、とてもかっこいい魚です。

徳島県には、アカメをはじめ、様々な魅力的な生きものが生息しています。新しい展示では、徳島県に生息する生きもの達のおもしろさやかっこよさも伝えていきたいと思っていますので、楽しみにしててください！

（動物担当：井藤大樹）



図1 新常設展で展示予定のアカメの剥製

移動展

徳島まるづかみ展・県西編

徳島まるづかみ展・県西編は、2021年8月にグランドオープン进行している新常設展プレビュー企画の一つです。美馬市立図書館を会場に、吉野川の自然や漁労具、そして阿波藍に関する資料、剣山系の昆虫と植物、川島銅鐸のレプリカといった、博物館資料の中でも県西部地域を代表するものを厳選した展示になっています。また、新常設展示の特徴の一つである映像やデジタル技術を用いた展示の中で、「三好長慶錦絵デジタルぬり絵」のデモンストレーション版を初披露します。博物館の新常設展示を一足先に体験してください。

徳島まるづかみ展・県西編

会期 令和2年12月18日(金)～
令和3年1月18日(月)

会場 美馬市立図書館（美馬市地域交流センターミライズ2階）フリースペース

休館日 火曜日、年末年始（12月29日～1月5日）

観覧料 無料

関連行事 展示解説&ワークショップ

日時：令和3年1月10日(日)・17日(日)
いずれも13:30～15:30

※申し込みが必要です。

問い合わせ・申し込み先

美馬市立図書館 TEL0883-53-9666



新常設展示「三好長慶錦絵デジタルぬり絵」イメージ



新常設展示の入り口 イメージ



吉野川の潜水橋を渡るお遍路さん

美馬市立図書館のご案内

美馬市地域交流センター ミライズ2階

〒779-3602

徳島県美馬市脇町大字猪尻字西分116番地1



ルリクワガタ



傾斜地にある畑（つるぎ町）

シリーズ名	行 事 名	実施日	実施時間	申込	対 象 (定員)	備 考
野外いきものかんさつ	初めての植物かんさつ (新春編)	1月31日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(15)	文化の森総合公園集合
ミュージアムトーク	ゼロから始める植物学~標本整理編~	1月31日(日)	10:30~12:00	要	小学生から一般(20)	同日開催 [初めての植物かんさつ]
たのしい 地学体験教室	木の葉化石の発掘体験	2月14日(日)	13:30~15:00	要	小学生から一般(15)	材料費300円 (高校生以下は不要)
	土柱周辺の地形と地質のかんさつ	3月14日(日)	13:00~16:00	要	小学生から一般(20)	阿波市

◎小学生が参加する場合は保護者同伴です。 ◎全ての行事が「文化の森教室」に該当します。

普及行事のお申し込みについて

- ◎1枚の往復はがきで、1行事のみ申し込むことができます。
- ◎行事日の1か月前から10日前までに、必着でお申し込みください。
- ◎返信用はがきの住所・氏名を記入してください。
- ◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳細は当選された方にお知らせします。
- ◎原則として、参加費は無料です。
- ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、参加人数や申し込み方法を変更する場合がございます。詳しくは、徳島県立博物館のホームページをご覧ください。
- ※お問い合わせは、徳島県立博物館まで (電話 088-668-3636 FAX 088-668-7197)

往復はがきの記入例

<往信の表面>	<返信の裏面>	<返信の表面>	<往信の裏面>
63 〒770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館	何も書かないで ください	63 〒00000000 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1.参加希望の 行事名 2.参加希望者 全員名 (学年・年齢) 3.住所 4.電話番号

学校教育に博物館を！

徳島県立博物館のもつ資源 (もの・情報・人) を、学校教育の場で有効に活用していただきたいと思います。

博物館常設展示室は閉室のため見学いただくことはできませんが、次のようなことについては引き続き博物館をご利用いただけます。

- 館内授業 (博物館、文化の森総合公園内で)
- 出前授業 (学校で)
- 博物館資料の貸し出し
- 教材研究のお手伝い
- 学習内容に関する質問や実験・観察の方法など、何でもお気軽におたずねください。
- 動物、植物、地学、考古、歴史、民俗、美術工芸といった専門分野の学芸員がご相談に応じます。お気軽にお電話ください。

お問い合わせは、徳島県立博物館まで
(TEL.088-668-3636 FAX.088-668-7197)

現在の常設展示室は、リニューアル工事のため、令和2年9月から令和3年7月末まで閉室します。新しい常設展示室のグランドオープンは、令和3年8月の予定です。



火おこし (出前授業・館内授業)

特典がいっぱい!! 博物館友の会に入会しませんか!

博物館友の会は、年間を通してさまざまな体験活動を行い、自然や歴史・文化について理解を深めながら、楽しく学んでいます。

個人でも、ご家族でも、ご入会いただけます。みなさんも参加してみませんか!

- 年会費 ・個人会員2,000円 ・家族会員3,000円
(10月以降にご入会される場合、会費はそれぞれ半額となります。)

■会員の特典

- 友の会行事に参加できます。
 - 友の会の出版物やミュージアムショップの商品を1割引で購入することができます。
 - 催し物案内や博物館ニュース、会報などが、毎月お手元に届きます。
- 詳しくは、友の会事務局まで (TEL.088-668-3636 FAX.088-668-7197)

◆2020年度の行事予定

令和3年1月23日(土)

「レキシルとくしま (徳島県立埋蔵文化財総合センター) の見学と周辺の遺跡散策」(板野郡板野町)

*行事名・期日・場所は変更する場合があります。詳しくは、友の会事務局まで
(TEL.088-668-3636 FAX.088-668-7197)



上記お問い合わせは、徳島県立博物館まで (電話 088-668-3636 FAX 088-668-7197)